

## 「荒野で叫ぶ声」

ルカの福音書 3:1~6

### はじめに

聖書にはイスラエルとそれに関わる国々についての多くの歴史的事実が記されていますが、聖書に記された歴史とは一般的なそれとは異なり、単なる過去の出来事や過ぎ去った事象の記録、ましてやただの昔話などではなく、そのすべてに預言的特性を有しており、すなわちそれは未来に起こる事、究極的、終末的に神が現実にならんとおられるご計画とその完成を指し示し、実話でありながらもこれを比喩的に表したものであり、つまり聖書の歴史はすべて神のご計画とその完成の「型」となっているのです。そしてそこには一つの大きなメッセージがあります。それは誰も過去の事実、歴史を変えることができないように、神が未来にならんとおられるご計画もまた同様であり、決して妨げられることのない、何ものにも揺るがされることのないものとして必ず起こる、一つも違わず確実に成就するというメッセージがあるのです。ですから聖書に記された歴史を学ぶことと一般的な日本史や世界史を学ぶこととは、その意義も目的も全く異なります。ですから今流行りの You Tube で近代史や現代史の専門家たちからその隠された事実を学ぶことよりも、この聖書に隠された神のご計画を学び、それを解き明かし、そして宣べ伝えることこそが、私たち教会のあり方であると信じます。なぜならこの世の情報メディアには嘘や偽物、また一時だけの虚しい情報ばかりがあふれかえっているからです。しかも質の悪いことにそれらはどれも一見実に魅力的で人の興味をそそる、面白そうに見えるものばかりです。皆さんは本物と偽物を見分ける方法をご存知でしょうか、それは偽物に目を留め、これを調べることはありません。本物にこそ目を留め、これをよく調べ、よく知る事です。本物を知らずして、どうしてその偽物が偽物だとわかるでしょう。何より神のことと、サタンのことと、どちらに目を留めるべきか…言うまでもありません。この世に偽りは無数に存在し、それを追いかければきりがありません。しかし本物、真実は常に一つであり、それは一つの書、この聖書にあります。それでは今日もただこの聖書から、そこにのみ隠された神のご計画について学んでまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

### 1. 四人の王

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督であり、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイトラヤとトラコニテ地方の領主、リサニアがアビレネの領主、

3:2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。

筆者ルカは、ここに記されたヨハネという人物とその内容が、正確な歴史的事実に基づいていることを表すためにこのように記述しているものと思われますが、聖書はすべて神の靈感によって書かれたもの、そして述べたように、神のご計画を指し示す「型」であると見るならば、ここに挙げられた、当時のイスラエルの地を支配していたピラト、ヘロデ、ピリポ、リサニアという、四人の権力者、四人の王たちによる支配構造は、聖書の歴史を辿れば他の記述にも同様のものを見ることができ、それらがある共通の神のご計画を指し示していると捉えることができます。ではまず創世記 14 章を開いてみてください。

### 創世記【新改訳 2017】

14:1 さて、シニアルの王アムラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティデアルの時代のことである。

これはイスラエルの父祖アブラム、すなわちアブラハムのいた時代、その当時もシニアル、エラサル、エラム、ゴイムという四つの王国、四人の王がその地方一帯で権勢を誇っていました。そしてここに大きな戦いが起こります。それによってソドム、ゴモラをはじめとする大小 11 の町と民族がその犠牲となり、すべての財産と食糧をこの四人の王たちに奪われてしまいます。しかしそこに 12 番目の民族としてヘブル人アブラムが参戦し、四人の王たちに立ち向かい、見事これらを打ち破り、奪われたすべてのものを取り戻した、という出来事がここには記されています。何度も言いますがこれはただの戦史、歴史ではありません。四人の王たちはそれぞれあるものを表しているのです。まずシニアルとはイスラエルが捕囚となったバビロンがあった地です。ヨハネの黙示録には終わりの日に獣と呼ばれる反キリストが再びこのバビロンを再建することが預言されています。つまりこのシニアルとは神のご計画における獣の大国としてのバビロンを指し示しています。次にエラサル(אֶלְסַר)とはヘブル語で見ますとそこには「神」という意味のエール(אֵל)と「反れる、墮落する」という意味のスール(סוּר)という二つの言葉を見つけることができ「神に逆らう、背教」という意味がこの名にはあることがわかります。そしてエラム(עֵלָם)には「世、世界」という意味が、またゴイム(גוֹיִם)には「(多くの) 異邦人」という意味があり、これら四人の王たちの国名の意味を組み合わせますと、「世の異邦人たちを従えて神に敵対する大バビロン」という存在が浮かび上がってくるのです。そしてこれに立ち向かい勝利するアブラムを含めた 12 の町と民族とはもちろん神の御子イエシュア・メシアを王とするイスラエルの 12 部族、神の民として回復されたイスラエルを表しているのです。終わりの日、イエシュアは再びこの地上に降りて来られ、イスラエルの王としてこれに敵対する反キリストのすべての勢力を打ち滅ぼし、イスラエルの王としてその民を救い出されるのです。このような神のご計画がここには「型」として表されているのです。

話が少し行き過ぎましたが、このように上記の四人の王たちは終わりの日に神に敵対する反キリストに従う世の勢力を表しており、これと同様の「型」を今日の箇所にも見ることができるということです。つまりピラト、ヘロデ、ピリポ、リサニアがそれであり、そして大祭司アンナスとカヤパが神の御子イエシュアを表しているのです。このアンナスとカヤパは実際に父と娘婿、つまり父と子の関係にありました。この事実からも、御父と一つであると言われた御子イエシュアが、そして真の大祭司である御方をここに見ることができます。

さらにこの四人の王という「型」について、ダニエル書にはこのような記述があります。

### ダニエル書【新改訳 2017】

2:31 王よ。あなたが見ておられると、なんと、一つの巨大な像が現れました。この像は巨大で、異常な輝きを放って、あなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。

2:32 その像は、頭は純金、胸と両腕は銀、腹とももは青銅、

2:33 すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。

2:34 あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。

- 2:35 そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の粃殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。
- 2:36 これがその夢でした。私たちはその意味を王の前に申し上げましょう。
- 2:37 王の王である王よ。…あなたはあの金の頭です。
- 2:39 あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こり、その次の第三の青銅の国が全地を治めるようになります。
- 2:40 そして第四の王国ですが、それは鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを砕いてつぶしますが、その国は、打ち砕く鉄のように、先の国々をすべて粉々に砕いてしまいます。
- 2:41 あなたがご覧になった足と足の指は、その一部が陶器師の粘土、一部が鉄でしたが、それは分裂した国のことで…
- 2:43 …それらが互いに団結することはありません。
- 2:44 この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。
- 2:45 それは、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのを、あなたご覧になったとおりです。大いなる神が、これから後に起こることを王に告げられたのです。その夢は正夢で、その意味も確かです。」

これはバビロンの王ネブカドネツアルが見た夢を預言者ダニエルが解き明かしたものです。ここにもやはり四人の王、四つの王国のことが記されています。ここでの四つの王国の解釈はイスラエルの歴史の中で彼らの地一帯を支配したバビロン、メディア・ペルシャ、ギリシャそしてローマの四大国のことです。そしてこれらをすべて打ち砕く「一つの石」が現れ、永遠に続く神の国を建てるのが正夢、確かに起こることとして預言されています。この「一つの石」とはもちろん地上再臨されるイエシュア・メシアのことであり、先のアブラムの時代の戦いが表していた「型」と同様の神のご計画のその完成が、ここにも啓示されているのです。なおこの預言はダニエル書 7:1~14 にも「四頭の大きな獣」という異なる描写でも記されており、同じ意味、同じ神のご計画を指し示しています。

このように、ルカは単なる歴史的背景としてこれを記しましたが、神はそこにご自分の計画を隠し、他の聖書箇所と結び付け、それ以上の意味を、この記述に神の御言葉、福音としての意味、意義を与えておられます。聖書は人ではなく神が書かれたもの、とはまさにこの所以なのです。

## 2. ヨルダンのバプテスマ

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:3 ヨハネはヨルダン川周辺のすべての地域に行って、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。

ヨハネはなぜヨルダンでバプテスマを宣べ伝えたのでしょうか。これも単なる状況説明ではありません。先のものにつながるメッセージが隠されています。しかしこれはヘブル語でなければ解き明かせません。

まずヨルダン(יַרְדֵּן)には「降りる、下る」という意味のヤーラド(יָרַד)という言葉が隠されており、創世記 11:5 にその最初の言及があります。

創世記【新改訳 2017】

11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

11:6 【主】は言われた。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。

11:7 さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」

11:8 【主】が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで【主】が全地の話しことばを混乱させ、そこから【主】が人々を地の全面に散らされたからである。

このように、神に逆らうために一つとなった民「バベル」すなわちバビロンを終わらせるために神である主が「降りて来られ」るという意味がヤーラドの本来の意味なのです。この言葉はもちろんイエシュアの地上再臨を指し示しています。

そしてバプテスマとは、ヘブル語ではターヴァル(טָבַל)と言い、本来は身体を水に、ではなく衣を血に「浸す」という意味の言葉です。

創世記【新改訳 2017】

37:31 彼らはヨセフの長服を取り、雄やぎを屠って、長服をその血に浸した。

このターヴァル、「血に浸した」ヨセフの長服とはその家族、一族の長子、長男が着る服です。ヨハネの黙示録には、やがて神の長子であるひとり子、御子イエシュアが血に染まった衣を身にまとい、再臨されることが記されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確か  
で真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

このように、ザカリアの子ヨハネがヨルダン川でバプテスマを説いたというこの出来事は、同じくヨハネという名の人（これも偶然ではありません）が書いた預言書にある、再臨のイエシュアと、諸国の民を打つという、その戦いを指し示しているのです。

### 3. まっすぐにせよ

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:4 これは、預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおりである。「荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意せよ。主の通られる道をまっすぐにせよ。』

3:5 すべての谷は埋められ、すべての山や丘は低くなる。曲がったところはまっすぐになり、険しい道は平らになる。

ここでのイザヤの預言は「主の通られる道をまっすぐにせよ」ということを強調しています。ここにはヤーシャル(יִשְׂרָאֵל)という言葉が使われています。この言葉はイスラエルの別名、詩的呼称であるエシュルン(אֲשֻׁרִים)の語源です。

#### イザヤ書【新改訳 2017】

44:1 「今、聞け。わたしのしもべヤコブ、わたしの選んだイスラエルよ。

44:2 あなたを造り、あなたを母の胎内にいるときから形造り、あなたを助ける【主】はこう言う。恐れるな。わたしのしもべヤコブ、わたしの選んだエシュルンよ。

ですから「主の通られる道をまっすぐにせよ」とは、神である主とエシュルンと呼ばれるイスラエルがしっかりと結びつく民として選ばれていることを意味しているのです。

またこのような事実もあります。大阪ヘブル研究所の所長、高原剛一郎先生が以前イスラエルに行かれた際、ユダヤ人のラビたちにイスラエル(יִשְׂרָאֵל)という名前の意味について質問したそうです。すると彼らは「神」エール(אֵל)の御前に「まっすぐ、正しい」ヤーシャル(יִשְׂרָאֵל)な民、国という意味だと答えたとそうです。イスラエル、この名は最初アブラハムの子イサクの子ヤコブ(יַעֲקֹב)、ヘブル語発音でヤアコーヴという一人の人に対して神が名づけられたものでした。イザヤは「曲がったところはまっすぐになり」と預言していますが、ここに使われている言葉はアコーヴ(יַעֲקֹב)といい、この言葉がヤコブ(יַעֲקֹב)と結びついていることはヘブル語で見れば一目瞭然です。つまり「曲がったところはまっすぐになり」とは「ヤコブはイスラエルとなる」という意味があるのです。神によるこのヤコブの改名は、単にその人の呼び方が変わり、その人自身の生き方が変わったというレベルにとどまるものではありません。以下の出来事、そこで語られた神の御言葉と、イスラエルとなったヤコブが行った以下の預言的行為を指し示しているのです。

#### 創世記【新改訳 2017】

35:9 ヤコブがパダン・アラムから帰って来たとき、神は再び彼に現れ、彼を祝福された。

35:10 神は彼に仰せられた。「あなたの名はヤコブである。しかし、あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルが、あなたの名となるからだ。」こうして神は彼の名をイスラエルと呼ばれた。

35:11 神はまた、彼に仰せられた。「わたしは全能の神である。生めよ。増えよ。一つの国民が、国民の群れが、あなたから出る。王たちがあなたの腰から生まれ出る。

35:12 わたしは、アブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与える。あなたの後の子孫にも、その地を与えよう。」

35:14 ヤコブは、神が自分に語られた場所に、柱を、石の柱を立て、その上に注ぎのぶどう酒を注ぎ、さらにその上に油を注いだ。

35:15 ヤコブは、神が自分と語られたその場所をベテルと名づけた。

実は神はこの出来事の以前にも創世記 32:28 の場面でヤコブの前に現れ、彼をイスラエルと呼んでおられます。しかし上記の箇所では「神は再び彼に現れ、彼を祝福」され、再度イスラエルと名づけられます。この事実はイエシュアの再臨、神が再び彼、イスラエルの前に、その民の前に現れる時にこそ神がアブラハム、イサクにも約束された上記の御言葉「生めよ。増えよ。一つの国民が、国民の群れが、あなたから出る。王たちがあなたの腰から生まれ出る。わたしは、アブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与える。あなたの後の子孫にも、その地を与えよう」という約束が果たされる、成就することを表しているのです。そしてヤコブはここで「石の柱を立て」これに「注ぎのぶどう酒を注ぎ」とあり、これは十字架によって血を注ぎ尽くされたイエシュアの初臨を表しており、そして「さらにその上に油を注いだ」とは油注がれた者、イスラエルの王なるメシアとして来られるイエシュアの再臨を指し示しているのです。そしてヤコブはこの地を「ベテル」すなわち「神の家」と名づけました。これはもちろんイスラエルの王となられるイエシュアによって建てられる、メシア王国、千年王国とも呼ばれる「神の国」の完成を指し示しています。このように、「曲がったところはまっすぐになり」とは、ヤコブがイスラエルと呼ばれることを意味しており、そしてそれは神の御子、イエシュア・メシアの初臨、そして再臨によってイスラエルの民を祝福の基とする「神の国」がこの地上に建てられることが表されているのです。そして以下の結論、

ルカの福音書【新改訳 2017】

3:6 こうして、すべての者が神の救いを見る。』

となるのが今日の箇所には表されているのです。イエシュアとはまさに「神の救い」という意味を持った御名です。やがてすべての肉なる者がこの御方を見る日が来るのです。

このように、今日の箇所にも創世記から黙示録までの聖書全体を網羅した圧巻の技巧が施され、奥義としての神のご計画がこれでもか、これでもかと言わんばかりに詰め込まれているのです。…主の御霊よ、どうぞ働いてください。このような真実を語る事が許された私のこの至らない小さな口と、聞くことができる皆さんの耳は本当に、本当に幸いです。ハレルヤ、主よ感謝します。

## 今日のまとめ

- (1) 皇帝ティベリウスの時代に立てられた四人の権力者たちと大祭司の描写は、終わりの日における反キリストの勢力とイエシュアを王とするイスラエルとの対立、戦いを表し、イエシュアがこれに勝利し、永遠の御国を建てられることが指し示されている。
- (2) ヨハネがヨルダンでバプテスマを説いたという事実は、ヨハネの黙示録 19:13 に記された再臨のイエシュア・メシアを指し示している。
- (3) 「曲がったところはまっすぐに」なるというイザヤの預言は、ヤコブがイスラエルと呼ばれるようになった出来事を指し示し、そしてそこに約束された神のご計画と、それを成し遂げられるイエシュア・メシアとその家「神の国」を指し示している。